

# 旧満洲国在住者の言語接触史 —文字資料とオーラルヒストリーのインターフェースを目指して—

甲賀 真広

## 1. はじめに

19世紀末から始まった日本の領土拡張に伴い、日本語の使用地域の拡張も図られた。この日本語普及政策によって日本語と他言語との言語接触が急激に進んだのである。これは、外地に赴任した日本人が現地語を、現地人は日本語を使用し、双方にコミュニケーションをとろうとしたことが背景にあった。例えば朝鮮、台湾、パラオや、旧満洲国などがその舞台となっている。そこで、本稿では、その旧満洲国で使用された接触言語「協和語」の言語環境に育った者に、当時の絵葉書などの文字資料を基に聞き取り調査を行ない、日本語普及について確認するとともに、旧満洲国の言語意識や言語使用に関するオーラルヒストリーを記録としてまとめることを目的とする。分析は、旧満洲国の数少ない言語に関する資料として文字資料を取り上げ、その量的分析を行ない、接触言語としての立ち位置を明らかにする。また、「協和語」とみられるその文字資料を旧満洲国在住者に文ごとに提示し、含まれている日本語および中国語の表現について以下の3点に焦点を当て分析考察を進め、当時の言語接触の実態を把握する方法をとった。これらを通じて、文字資料とオーラルヒストリーのインターフェースを目指したい。

- ① 当時、文字資料のような言葉を使っていたかどうか
- ② 当時、文字資料のような言葉を聞いていたかどうか
- ③ その表現はどのようなイメージを伴っているか

## 2. 本稿の概要

### 2.1 調査について

2015年から筆者が定期的に聞き取り調査を行っており、2015年8月5日、2016年5月29日および8月7日の3回に渡り、デジタル録音をしながら合計8時間程度の半構造化インタビューを実施している。調査の内容として、文字資料である絵葉書を下記のように文面のみ見せて、そこに載っている表現や単語を使っていたかどうか、当時の言語状況などについて尋ねている。その結果、当時の市場など公的な場面における言語選択のような言語状況、日本人住民として見た旧満洲国での生活の様子、自身の中国語学習、旧満洲国で生まれたことのアイデンティティーなどについて聞くことができた。言語状況の一例として、「クワイクワイデー」という語が記載された資料1について言及しているのが以下の事例1である。

#### 資料1：「記念撮影」

日本兵1：ニデー(お前)一緒に写真撮るからクワイクワイデーライライ(早く来いよ)

日本兵2：ミンパイ(解つた)

日本兵3：いよう一生一代の顔だぞ・・・・・・・・

事例1：『クワイクワイデー』が含まれる資料を見たインフォーマントのコメント  
インフォーマント：「クワイクワイデー」これは「急いでくれ」って意味だよ「急いでやれ」って

筆者：「急いで」なんだ

インフォーマント：「急いで」だよ「早くやれ」って「クワイクワイデー」、「早く」「急いでやれ」「のろのろやるな」って意味だよ、日本兵が使う場合な、「早く持ってこい」とか日本兵が使ってた、苦力って知ってるだろ？使用人だよ、苦力ってというのは家事をしたり土方やったりするんだよ

本稿で取り上げた文字資料は、日本語の要素はすべてを日本語母語話者の筆者が確認し、それを4等分に分けたのちに日本語母語話者10名で文法性判断を行なっている。また、中国語の要素は中国語母語話者3名による文法性判断を行なってもらっている。本稿で文字資料について、「正文である」や「非文である」と述べた場合、すべてこのときの文法性判断の結果に依拠している。

## 2.2 インフォーマントについて

### 2.2.1 インフォーマントの選定

本稿では一人のインフォーマントをもとに議論を進めていく。このインフォーマントの選定基準は、「代表的な満洲」もしくは「一般的な満洲」の出身者もしくは在住者という観点からではない。聞き取り調査をするにあたり戦争に関することも当然聞く必要があり、それを話してくれるための信頼関係を築かなければならなかった。そのため長時間の調査を引き受けてくれるインフォーマントということを選定基準とした。これらを考慮し本稿では安東出身のインフォーマントに協力を依頼した。こうした背景から旧満洲国の言語環境の一般化を目指すものではなく、当時の環境の一端を示すことを目的としている。

これまで三度に渡って調査を行ってきたが、インフォーマントは優れた話術と克明な描写で当時の状況について語ってくれた。

### 2.2.2 インフォーマントの生い立ち

インフォーマントは1928年に生まれ、現在88歳である。生まれてから17歳まで旧満洲国の安東(現在の丹東市)で暮らしていた。藤原(1984)の昭和20年の旧満洲国の地図に、インフォーマントが住んでいた安東の所在を筆者が円で示した(図1)。

彼の父がアメリカで牧師をしていた経験があり、旧満洲国の安東でも牧師として赴任していた。インフォーマントは南満洲鉄道株式会社が作った日本人学校に通っていた。この学校は日本人からの人気が高く、日本人であるにもかかわらず入学できない

人もいた。その一方で、優秀な朝鮮民族の学生は数名ではあるものの入学を許され、日本人と同じように授業を受けていたという。この学校内では朝鮮民族だからといった差別はなかったようである。終戦直前のソ連軍による旧満洲国への進駐で、インフォーマントをはじめ多くの日本人は金品を取られ職も失い生活が困窮していたことや、船が接近または接触すると爆発する機雷が海に残存しており引き揚げ船が出港できないといったことから、インフォーマントは16歳で終戦を迎えたが、すぐに日本に引き揚げることができなかった。当時は、家財道具を中国人に売り歩かなければならず、大変苦勞をした経験を持つ。その時の様子を彼の母親が記していたので、一部紹介したい。終戦後に、「酒気を帯びたソ連兵に、『金と女を出せ。』とピストルをつきつけられた」経験があることや、「菓子、南京豆、ビールをたらふく飲み食いしくばくかの金を手にして帰った兵隊もいました。終戦から一年以上もこのような状態が続き、住民は一日も早く祖国に引揚げたいと話合っておりまして。(甲賀1952, 1968)」ということを書いてある。インフォーマントは、戦時中にも関わらず、戦争が起こっていること自体もどこか遠い場所で行なわれていたものであったと話した。しかし終戦後になって初めて彼らの本当の困難が待っていたという。



図1：藤原(1984)をもとにした旧満洲国の地図

### 2.2.3 インフォーマントを取り巻く言語を含めた環境

インフォーマントは当時の環境について次のように教えてくれた。旧満洲国では日本人、満洲人、漢人、朝鮮人、蒙古人による五族協和を謳っていたにもかかわらず、実際には差別が日常的に行われていた。戦時中、この五族の中では日本人の地位が高

く、差別をする側に立っていたのである。また、多くの日本人は何不自由のない生活を送っており、中には現地人のお手伝いさんを雇う家庭さえあった。

当時、旧満洲国で話されていたことばを現地の人たちは「満洲語<sup>1</sup>」と呼んでいた。これはツングース諸語の満洲語ではなく、後述の分析から分かるように、インフォーマントが言う「満洲語」とは当時のチマタで使われていた口語で、中国語の1方言である。インフォーマントはこの満洲語を中国語の方言と認識しており、学校側の意向で標準語の北京官話を学習していた。この授業のおかげで、北京官話の読み書きができるようになったという。しかし、インフォーマントは当時勉強した北京官話と現在の中国語とのギャップを感じており、「現在の中国語は分からない」とも述べている。

日本語普及の表れとして、日本人以外が経営するお店で、日本語での出前依頼を受けているところもあった。(例：「餃子(ぎょうざ)十皿(とさら)頼むよ。」)

五族には入らなかったものの、ロシア人も旧満洲国で生活しており、パン屋を営む人がいた。その店内ではロシア人との会話はほとんど行われず、非言語コミュニケーションである指さしでやりとりが行われたという。

#### 2.2.4 インフォーマントの使用言語

使用言語について、インフォーマントの両親が日本人であるため、家の中では日本語を使用していた。その一方で、中学校では北京官話が正課の授業であったため、中国人と話すときは北京官話を使用したという。当時の安東地区に住んでいた日本人たちと現在も定期的に同窓会のようなもの(安東会)を開催しており、そこでは当時を懐かしんで北京官話を用いて会話がされることもあると話した。これについては筆者が参加した2016年11月14日に行なわれた安東会でも、北京官話を使用している様子を確認できた。この詳細については別稿に譲ることとしたい。

### 2.3 文字資料について

本稿の調査で用いた文字資料は、張(2011, 2012)で取り上げた軍事郵便絵葉書である。この文字資料について張は次のように説明している。

本研究でデータとして用いた資料はすべて筆者が所持している戦時中の旧日本軍で流通していた軍事郵便絵葉書の原物であり、作者名は明記されないのがほとんどである。戦後66年以上経過しているため、著作権の期限が切れている。これらの絵葉書は「満洲国」時代の言語景観関連データの収集段階で、日本の古本屋、大型絵葉専門店、ポケットブックスなどから入手したものである。

軍事郵便とは第二次世界大戦中に戦地にいる軍人が日本へ、或いは日本から戦地の軍人に向けて私信を送るための郵便制度である。通常、無料で枚数の制

<sup>1</sup> インフォーマントは「協和語」という用語を使用しなかった。しかし、混合言語やピジンがなかったと否定しているわけではない。インフォーマントはそれらを「間違った中国語」と認識している。

限はあるが、軍事行動などに係る文書は含まないことになっていた。軍内部の検閲上の理由で、郵便物自体は封筒を使わない検閲可能な葉書が多用され、軍事郵便葉書と呼ばれていた。当時の従軍画家を中心に描かれた軍事郵便絵葉書には、山水画、漫画、戦争画などが取り入れられ、特に軍事教育、言語教育、国威高揚の宣伝手段としてよく用いられていた(張 2011 p.55)。

ここからわかるように、調査で用いた文字資料は戦地にいる人から日本へ、日本から戦地へ宣伝手段、いわゆるプロパガンダとして送られたものである。また張はこの文字資料についてこうも説明している。

一方、本研究用の絵葉書は「満洲国」時代の軍隊生活、現地人との交流場面(食生活、買物、学習、遊樂、理髪、乗車、交通整備など)を描写しているだけでなく、登場人物の会話内容も文字化記述されているのである。資料の信憑性については確保されていると考えている(張 2011 p.55-56)。

本稿では、「芸術は天から落ちるものではなく、生活から来るものである。生活原型がなければ、芸術家にも創作のインスピレーションは現われない(張 2012)」とあるように、インフォーマントがかつて住んでいた旧満洲国での生活原型を探るための糸口として文字資料を用いている。さらに、旧満洲国に関する文献や関連データは限られている中、このような文字資料を分析することは非常に有益であると判断した。そのため、これをもって知りうることを提示するために使用する。

### 3. 文字資料の量的分析

張(2012)が取り上げた文字資料はその発話部分の特徴を分析したのみにとどまり、量的な分析までは及んでいない。また、後述する「混合型」とは具体的に何を指しているかを考えるため、資料に出てくる文の日本語と中国語の割合を探っていく。

今回確認した資料は漫画風の軍事郵便絵葉書 106 枚で、旧満洲国における日本人と現地の人々との接触を描いたものである。その中には日本人のみが描かれていることもあれば、現地人のみが描かれているものもある。発話者全体をみると 2/3 が日本人であるが、日本人も中国語のみを使用する箇所があり、発話者の割合による形態素の偏りはみられなかった。それでは旧満洲国では、どのような言語が使用されていたか提示していこう。絵葉書の台詞にある文は、日本語が 194 文、中国語 37 文、日本語と中国語が同一文内で混在している「混合型」が 49 文にのぼる。また、これらの文内における節の数は、中国語のみで構成されているのが 44 節、日本語のみで構成されているのが 312 節、混合型で構成されているものが 51 節であった。以上は表 1 のようにまとめられる。

表 1:「絵葉書の台詞における文と節の出現数」

絵葉書106枚中	日本語	中国語	混合型	合計
文数	194(69.3)	37(13.2)	49(17.5)	280
節数	312(76.7)	44(10.8)	51(12.5)	407

中国語文、日本語文、混合型の文をそれぞれ例示すると資料2となる。(1)が中国語文、(3)が日本語文、(2)(4)(5)が混合型の文として扱っている。その中でさらに、混合型の文に含まれる形態素を言語別に見ると、日本語は72.8%に当たる268形態素で、中国語は27.2%の100形態素である(表2、図2参照)。したがって、旧満洲国という場所でありながら中国語の割合が少なく、日本語の割合がかなり多く占めていることが分かった。

資料2:「洋車」



- |                                      |        |
|--------------------------------------|--------|
| (1)現地人 : タイジンナルチュイ(お客さん何処まで行くんですか)   | (中国語文) |
| (2)日本兵1: クワイクワイデー(早くはやく)走ってくれ後に負けるなよ | (混合型)  |
| (3)日本兵2: 愉快々々                        | (日本語文) |
| (4)日本兵3: 前を追越せばリヤンモーチエン(二十銭)奮發するぞ    | (混合型)  |
| (5)日本兵4: あまり気ばるなよチアーオ(足)が痛いよ         | (混合型)  |

表 2:「混合型49文における量的分析」

	日本語	中国語
形態素数	268(72.8)	100(27.2)

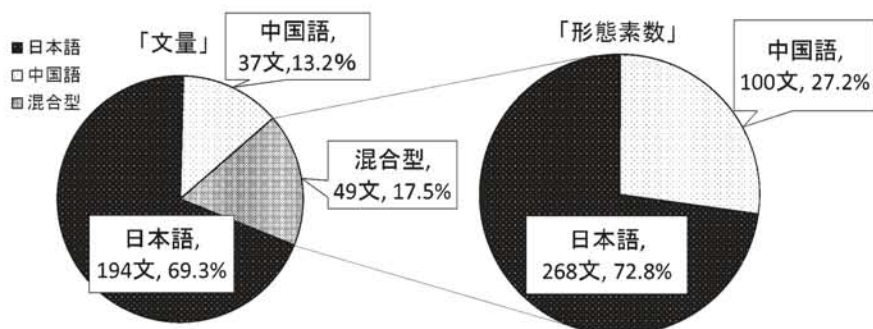


図2: 「文字資料にみられる文量と形態素数の割合」

#### 4. 接触言語としての「協和語」はどう分類するか？

これまで旧満洲国で用いられた言語に関する研究は数が限られているが、その接触言語には複数の名称が使われている。ここで名称を整理しながら、実態に関する分類を再考察したい。まず桜井(2015)は「ピジン中国語」以外に、「協和語」や「兵隊支那語」という名称について分析している。「沿線漢語」や「沿線支那語」という名称もある(中島 2016)。一方、絵葉書から探った張(2012)は「語彙レベルの借用、日本語語順の中国語、日本語助詞の過剰省略、日本語文と中国語文の混合使用など、言語接触は様々なレベルで発生している」とし、これが「絵葉書に見られる言語接触の様々な側面はおそらく、これまでに先行研究に登場した『協和語』という現象であると思われる」と述べ、「協和語」という名称を用いている。しかし、張(2012)では、このような言及にとどまり、接触言語としての分類は試みていない。本稿では「協和語」と「ピジン」、「混合言語」、「クレオール」との関連性を検討する。まず、「クレオール」とは母語化が第一条件になっているが、「協和語」は明らかに使用者にとって母語ではなかったもので、これに当たらないことが分かる。さて、「ピジン」と「混合言語」はどうだろうか。

##### 4.1 「協和語」は「ピジン」か？

桜井(2015)は「協和語」を「ピジン中国語」として分類しているが、果たしてこれでいいだろうか。本項では、文法面と語彙面に分けてそれぞれを考察していく。

###### 4.1.1 文法面

「協和語」の中には、確かに両言語の中にピジン化された(非文に当たる文法的に単純化された)要素もみられる。例えば、張(2012)で指摘された「デーの拡大使用」がそれにあたる。「ニデー [你的] どこへ行くんだ」という発話があるが、本来所有格である「ニデー」が主格として使用されているので、中国語として文法的に合っていない(非文)のである。日本語の部分にも「二十銭安いあるか」のようなピジンの要素が含まれている。資料全体ではこうしたピジンの中国語の要素は7節で、ピジンの日本語

の要素は69節にものぼる。文法面をみると、「ピジン」の特徴である文法の単純化が起きており、「協和語」は「ピジン」の側面を持っているといえる。

#### 4.1.2 語彙面

次に語彙面をみていく。典型的な「ピジン」の場合、語彙の8割以上は同一の(上層)言語に由来する(Sebba 1997:25)と言われている。では「協和語」はどうだろうか。上記(3節参照)では「協和語」を、語彙という単位より詳細な形態素での集計を行なった。その結果、日本語が72.8%に当たる268形態素で、中国語が27.2%の100形態素であった。つまり典型的な「ピジン」の定義である8割という条件を満たしていない。したがって語彙面では、「ピジン」の特徴には当てはまらない。

#### 4.2 「協和語」は「混合言語」か？

Trudgill(2002)や Bakker(1994)は「混合言語」を二つの起点言語をもつものとして定義づけている。さらに、混合言語は文法が単純化されずに用いられる(ロング 2012)。これはまさに語彙面のことを言っている。例えば、ロング・甲賀(2017)では小笠原混合言語を分析しており、これは98発話からなる談話を分析した結果、1750語のうち、50.6%にあたる885語は日本語、49.4%にあたる860語は英語であるとしている。つまり、混合言語の語彙は二つの起点言語ではほぼ同じ割合でみられるのである。一方、「協和語」は前述したように文法が単純化され、語彙はおよそ7対3と同じ割合ではない。このことから「協和語」は「混合言語」とは言えない。

#### 4.3 「協和語」の分類

以上のことに鑑みて、「協和語」は文法面では「ピジン」の特徴を持ちながらも語彙面では「ピジン」とは言い切れず、また「混合言語」の特徴は持っていないが二つの起点言語を持つ点では類似している。つまり、「協和語」は両者の中間的な位置づけであると考えられる(表3)。

表3:「協和語の分類」

特徴 \ 分類	ピジン	混合言語	協和語
文法の単純化	○	×	○
起点言語の数	3言語以上	2言語	2言語
起点言語の割合	8割以上は同一の(上層)言語に由来	2つの起点言語でほぼ同じ割合	およそ7対3



## 5. 聞き取り調査の質的分析

### 5.1 文字資料に対するインフォーマントのコメント

文字資料を読んだインフォーマントは一語一語を丁寧に確認し、イメージや当時の使用の様子を教えてくれた。本項では、その確認の際にコメントしたことを資料ごとに取り上げ、紹介していく。

まず、資料3では、日本兵が食事をしている風景が描かれている。ここで取り上げる発話は日本兵による「今日の飯はとともハーオチー(美味しい)」である。

#### 資料3:「食事」



日本兵1：ウオーチーデータイドーラ(俺は喰ひすぎた)

日本兵2：今日の飯はとともハーオチー(美味しい)

インフォーマントは「ハーオチー(ハオチー)」を「おいしい」という意味で使用したという。さらに、これに対して「とてもおいしい」という強調表現を用いるときには「ヘンハオチー」と言っていたという。当時を思い出して、それぞれ声調をつけて発音することができ、文字にした場合「ヘン」には「変」という漢字を使っていたと紙に書いて教えてくれた。さらに、インフォーマントは現地人の出前の人に対して、「ヘンハオチーラ。シェイシェイ。(とてもおいしかったよ。ありがとう。)」という表現も使ったことがあると教えてくれた。しかしこの「ハオチーラ」は中国語では用いることができない非文である。北京官話を学習していても、非文にあたる表現を使用していたことが分かった。

次に資料4で言及してもらった部分を取り上げる。資料4は日本兵3人、現地人1人が描かれており、日本兵が現地人に靴を直してもらっている様子が描かれている。インフォーマントは現地人の発話「トントンデーシイエシイエ(解りました有難度う)」

という部分についてコメントしてくれた。

#### 資料4：「靴直シ」



日本兵1：名誉の負傷だウーチエヌ(五銭)にまけとけハハ・・・

現地人：トントンデーシイエシイエ(解りました有難度う)

日本兵2：ニデー(お前)のはもう修繕したのか

日本兵3：オデー(自分)のはもうお先にワンラー(完了)だよ

「トントン」が「本当に」、「デー」が日本語の「で」、「シイエシイエ」が「ありがとう」というように当該表現のことを考えていた。インフォーマントによれば現地人は「デー」を使い日本語のような話し方にしようとしていたと教えてくれた。つまり、「デー」は助詞「で」のような役割であったと話す。しかし「トントンデーシイエシイエ」は、3人の中国語母語話者によれば、決して日本語の要素は入っておらず、このままで正文であると判定された。

このように、日本人は「デー」と「で」という似た音声について知覚するとき、日本語として聞き取っている者もいたことが明らかとなった。張(2012)では「デーの拡大使用」を指摘しているが、拡大使用にとどまらない「デー」の新たな側面があったことが分かった。

次に資料5を取り上げる。資料5では日本兵と現地人が牛の売買をしている様子が描かれている。インフォーマントは現地人の「カンカンよろしいあるか」という発話

に対してコメントをしている。

### 資料5：「牛の買い入れ」



日本兵1：牛四頭だな、豚はないか

日本兵2：豚隠してある支那軍へ売る金胡魔化す豚あること知らせない

日本兵3：一緒に買ってしまふ出してくれ

現地人：カンカンよろしいあるか

戦時中は中国人が物を売り歩くときに、こうしたことばを日本人客相手に使用していた。しかし、戦後には日本人の立場が逆転し、日本人でも布団など家財道具を売り歩かなければいけなくなった。そうしたときに、インフォーマントは「カンカン」のような言葉を使用せざるを得なかったという。また、ここで見られる「よろしい」は敬語として使用しているという印象を持っていた。戦時中の中国人は日本人から見たときに、地位が下であった。したがって、彼らは「よろしい」のような敬語表現を使用しなければならない状況であったのだろう。

このように、戦時中は「カンカンよろしいあるか」のような言葉を中国人が使用していたが、戦争が終わり日本人の地位が逆転すると、日本人がこうした言葉を使わなければならなくなったのである。

次に資料6を見ていく。この資料は日本兵が外出する様子が描かれている。ここでは日本兵同士の会話を見ることができる。インフォーマントがここで言及しているのは、その日本兵が用いている一人称、二人称名詞である「オデー(自分)」や「ニデー(お

前)」についてである。

資料6：「外出」



日本兵1：ニデー(お前)どこへ行くんだ・・・

日本兵2：オデー(自分)活動でも(観る)かんかんしようと思ふ

日本兵3：シンクシンクなア・・・(御苦勞御苦勞)

日本兵4：よしッ!!

「間違っていることば」だとはっきり批判して、使っていないと答えた。また「自分」を意味する「オデー」も(主格で用いるときは)「間違っていることば」で「我(ウオー)」が正しい形と修正することさえもしていた。事実、標準中国語ではこのように「デ」が付いた形を主語として使うのは誤用(非文)になるのでインフォーマントの指摘が正しい。また、インフォーマントは、どちらの用法も、民族を問わず聞いたことがないという。多数の文献(張2012、桜井2015など)にはこうした用法がチャマタで使われていたことが分かるが、学校で北京官話を学習していたインフォーマントのような話者はそれを認めないし、当時聞いていた記憶は特になくことが今回の調査で分かった。

## 5.2 北京官話中心の第二言語教育

以下、事例2~4で確認できるように、「満洲語」ではなく「北京官話」を学んでいたこと、さらには現在まで使用できるレベルまで教育されたことが分かった。そして、

なぜ学校で北京官話が選ばれて教育されたか回答が得られた。

### 事例2：「中学の学校教育禁止された『満洲語』」

インフォーマント：俺なんか中学校の時に、北京官話って言ってね、いわゆる中国語って言ったってさ、満洲語ではだめだからってな、中国の本場の中国語を教えるってね、向こうの中国の人から2年間教わったんだよ

当時の学校教育では、チマタで話されていた「満洲語」は「だめなもの」として見られていた。そのため、本場の中国語を学ばせるために、学校では中国語を母語とする先生が「本場の中国語」を教えていたことが分かった。

### 事例3：「現在まで使用できる上級レベルの北京官話教育」

インフォーマント：もともと中国語は漢文から始まったんだから、漢語だよな？満洲ができてから、北京が一番いいだろうって言って、北京官話っていうのを旧製の安東中学の場合、中国の人が教えに来てた、だから、本場だよ、中学1年から2年、北京官話の向こうの中国の先生が来て教わった、それがいまは通用しないからな、字が変わっちゃったろう

筆者：当時の言葉が分かる人が会えればね

インフォーマント：そうだよ、安東会でもみんな北京官話でしゃべってるよ、お互いに、今の中国語知らないから

安東会(当時の安東に住んでいた者たちの同窓会)に出席している者たちは、当時チマタで使われていた言葉ではなく、学校で習った「北京官話」を懐かしんで使用しているということを聞くことができた。たとえば、現在の学校教育のカリキュラムでは英語教育があるが、同窓会で再会する地元の旧友たちと、能力の問題や親しみが無いなどの理由で、英語を用いて会話をすることは無いだろう。このことから考えると、現在まで使用できるということはかなり高いレベルで教育されていたことが分かる。さらに、引揚げ後にはインフォーマントが今の中国語が知らないと言っていることから中国語学習を継続していなかったこともわかる。したがって、インフォーマントは、当時の北京官話を現在までも使用できるほど高いレベルで教育を受けていたということが明らかとなった。

### 事例4：「なぜ学校で北京官話教育されたか」

(筆者が、学校で北京官話教育された理由について尋ねた。)

インフォーマント：満洲はさ北京中心だったからさ、言葉の中心が北京だと思ってるから。生活だってだいたい北京が満洲を支配してたんだから、生活全般を。言葉もそうでしょ。北京官話が満洲を、満洲国ができる前までは全部北京語だもん中心は事例2では、「満洲語」をだめなものという話を聞くことができたが、事例4では、

言葉だけにととどまらず生活まで北京が中心であったことを話してくれた。その中心であった彼が北京語とも表現する北京官話を学習するのは当然の流れだったのだろう。

## 6. 聞き取り調査から見てきた言語使用意識

インフォーマントの言語使用意識にも興味深い点が見られる。資料の「協和語」に含まれているピジンの日本語は当時、中国人を馬鹿にするものとして認識されていた。すなわち、当時の旧満洲国は五族協和を謳っていたものの、「協和語」の使用によって差別が行なわれていたのである。例えば、資料6では日本人同士が使っているが、「マンマンデープーシンだぞ」(ゆっくり的だめだぞ)の文を取り上げ、「ちゃんとした中国語が話せないくせに」、文末詞「だぞ」を用いることによって中国人を見下していたという印象を持っている。

### 資料6：「内務班掃除」

日本兵1：マンマンデープーシンだぞ(ゆっくりやっちはいかん)

日本兵2：はツ・・・・クワイクワイデー(早く)やります

終戦直後になると、アジア大陸に取り残された日本人は立場が逆転し、家財道具などを売り歩かなければならなかった状況を語っている。皮肉にもその時に正確な中国語が話せない日本人は結果的にピジンの中国語を使用しなければ生きていけなかったという。つまり、「協和語」には立場が上の者が使えば見下すことになり、立場が下の者が使えば、へりくだった印象を与えることができるものとして使用されていたのである。

以上のことから、北京官話中心の言語教育、「協和語」が人を見下すという意識が作用し、インフォーマントは、「ハオチーラ」のように正しい中国語だと思えば無意識のうちに用いることもあるが、「協和語」の積極的な使用をしないことにつながったと考えられる。なお、「インフォーマントは「協和語」という用語そのものを用いていたわけではないが、複数の事例で分かるように、「協和語」が指している混合言語やピジンの特徴を持つ接触言語の使用があったことを認めている。言語学者は確かにこうした接触言語とインフォーマントが「中国語の1方言」として認識している「満洲語」との間に線を引く。しかし、インフォーマントのコメントの全体を通してみると当時の住民にとってこれらは「ちゃんとしたことばではない」という漠然とした捉え方しかしていないことが分かる。

## 7. 本稿のまとめ

これまで文字資料のみによって行なわれてきた「協和語」の研究に加えて、本稿では生きた証言者の体験談や具体的表現の使用意識を分析し、日本語の言語接触史の新たな資料を提示することができた。

本稿で分かったことをまとめると以下の通りである。

(1)協和語の分類

- ①文字資料における接触言語について量的分析を行なった結果、日本語の割合が大きいことが分かった
- ②「協和語」は「ピジン」と「混合言語」の両方の特徴を持ち合わせながら、相違点もあり、両者の中間的位置づけである

(2)言語使用

- ①当時使われていた口語は「満洲語」と呼ばれることがあった
- ②学校教育では中国語の方言の「満洲語」ではなく、標準語の「北京官話」を学習させ、それぞれを方言や標準語と考える人もいた
- ③日本人と中国人の会話において「協和語」は使用せず、北京官話を用いている者もいた
- ④当時の学校で教えられた北京官話は、現在まで用いることができるほど、レベルの高いものであった

(3)言語意識

- ①戦時中と終戦後では日本人の地位の変化があり、協和語を使用する意味・目的も変わった
- ②張（2012）で「デーの拡大使用」を指摘しているが、拡大使用にとどまらない知覚に関する新たな側面があった
- ③日本人学校での教育の結果、「協和語」に対して否定的な考えを持つ日本人がいた
- ④「協和語」に対し否定的な話者でさえ、無意識にピジンのような中国語を使っていた表現もあった
- ⑤「協和語」は、立場が上の者が使えば見下すことになり、立場が下の者が使えば、へりくだった印象を与えることができるものとして使用されていた
- ⑥北京官話教育と「協和語」の相手を見下すような働きから、「協和語」の使用を拒む者もいた

本稿では軍事郵便絵葉書という文字資料を用いて、当時の様子をインフォーマントに尋ねていった。こうした文字資料によるオーラルヒストリーの聞き取り調査は記憶をたどる手段として有効であることも分かった。

## 8. 今後の課題

2017年2月現在で聞き取り調査に協力してもらったインフォーマントの数は、本稿で分析を行なった者を含めて日本人の引揚者6名である。日本人にのみしか行なえていない現状に鑑みて、今後は、インフォーマントの数を増やすとともに、住民、兵士、国籍、性別など問わず多様なバックグラウンドを持つ人たちから証言を集め、多角的な観点から研究を深めていき、それぞれの口語はどのようなものであったか、旧満洲国で生まれた者の言語習得についても明らかにしていく必要がある。これについては今後の課題としたい。

## 付記

本稿は、インドネシアのバリ島で行なわれた 2016 年日本語教育国際研究大会(ICJLE)におけるポスター発表、日本語学会 2016 年度秋季大会(山形大学)における口頭発表の内容に加筆・修正を行なったものである。席上では先生各位から有益なコメントを賜った。心より御礼を申し上げる。また、この研究をご指導くださったロング・ダニエル先生にも心より御礼を申し上げる。

## 参考文献

- 甲賀綾子(1952)『遍歴』私家版
- 甲賀綾子(1968)「共に歩んだ五十二年」『甲賀綾一記念集』私家版 甲賀道生(編) pp.28-37.
- 桜井隆(2015)『戦時下のピジン中国語—「協和語」「兵隊支那語」など—』三元社
- 張守祥(2012)「満洲国地域における言語接触—写真資料からみる日本語普及史—」首都大学東京博士論文
- 張守祥(2011)「『満洲国』における言語接触—新資料に見られる言語接触の実態—」『人文』10 学習院大学 pp.51-68.
- 中島和男(2016)「協和語の成立について」8月5日東アジア日本語教育・日本文化研究学会にて口頭発表
- 藤原作弥(1984)『満州、少国民の戦記』新潮社
- ロング、ダニエル(2012)「『小笠原混合言語』は本当に「言語」なのか—5つの側面からの検証—」『日本言語文化研究会論集』8 政策研究学院大学 pp.29-37.
- ロング、ダニエル&甲賀真広(2017)「接触言語の分類に関する量的研究—起点言語の割合を通して—」『人文学報』 pp.45-54.
- Bakker, Peter (1994) *Mixed Languages*. Amsterdam: Institute for Functional Research into Language and Language Use (IFOTT)
- Sebba, Mark (1997) *Contact Languages*. New York: St. Martin's Press.
- Trudgill, Peter (2002) "Dual Source Pidgins and Reverse Creoloids", *Sociolinguistic Variation and Change*. Georgetown University Press.

(こうが まさひろ・首都大学東京大学院博士前期課程)